

祭りばやしがいきこえてくる――



満月観音

浦賀の祭り

浦賀の人々の祭りずきは、祭りの規模が横須賀では随一のものであり、それが浦賀の人々の自慢のひとつになっていることも大きな理由でしょう。

浦賀の祭りというのは、もちろん東・西叶神社の例大祭のことで、大平洋戦争前までは9月14日・15日の両日と決まっていたのですが、戦後になってからはこの近くの土曜・日曜で行なわれています。

古い記録を読みますと、祭りは12日の職立てにはじまり、13日は勢揃いといって各町内の警固が列を整えて順次神社に参拝します。警固とは、宮神輿が巡幸の折、その前と後を警固する人々のことで、大人の警固は町内会の長老格の男性、子どもの警固は7・8才の男女で、揃いの袴に花笠をかぶり、手には杖をもっていました。

14日は西叶神社では浜降り祭が行なわれ、神輿が神社から海岸の鳥居まで渡御します。浜降り祭には、神輿を祀ぐ意味と海辺が神のよりどころとしての聖地であり、ここで神を神輿に移すという二つの意味があります。

この日、東叶神社では、早朝、新井町の船手衆によって奥宮まで担ぎ上げられた神輿に神霊を移座する神事が行なわれ、これが済むとまた新井町の船手衆の力によって「屋下げ」が行なわれます。このころ東浦賀各町、築地古町の力は住重のなかで現存しない、大ッ谷、新町、洲崎の各町は山車・屋台を鳥居の前に参集させて、この神事に賑わいを入れます。

15日は神輿の各町巡幸です。西叶神社の巡幸順路は宮下・谷戸・洞戸・荒巻・築地新町・芝生と行き、転じて谷戸の海岸から船で浜町に向かいます。

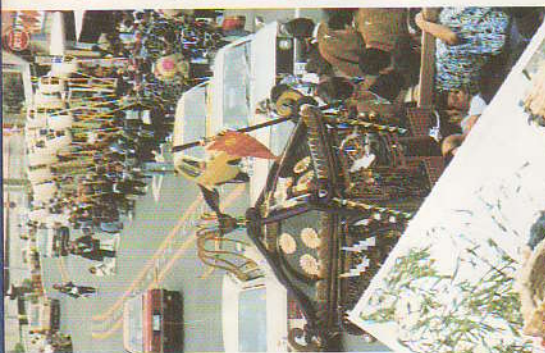
この途中に祝いの船歌が唄われ、祭は最高潮に達します。浜町に上がった神輿は川間・蛇島・紺屋・高坂・田中と巡って神社への巡路でした。

東叶神社は神社をでると新井・洲崎・大ッ谷・築地古町へ巡り、蟹田橋（浦賀警察署の前）を折り返し、大ッ谷の海岸より洲崎まで船に乗せていきました。東には新井町に若宮丸、洲崎町に明神丸という御座船を曳航する任にあった船があり、ここでも船歌が唄われました。この神事も現在では全くみることができなくなり、船歌の歌詞のみが伝わっています。

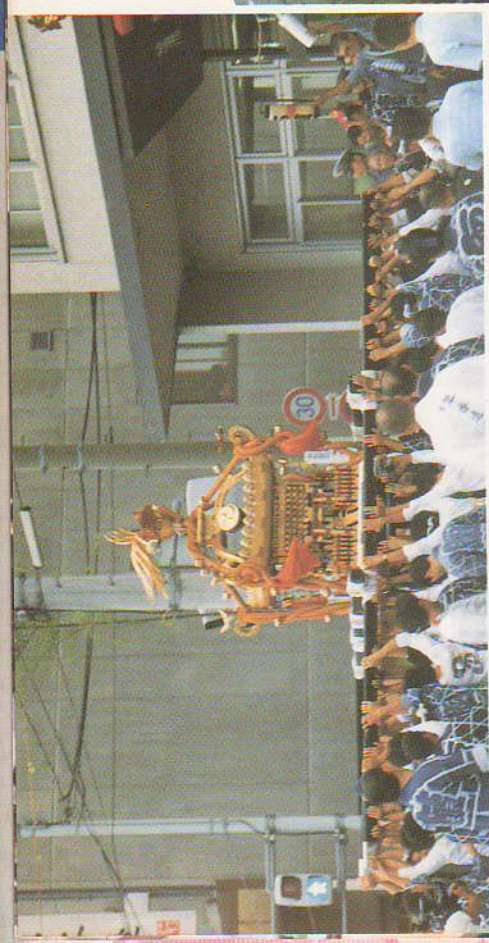
これほどの祭りですから、この行列を上から見下すことは厳禁されており、祭り当日は二階の雨戸はすべて閉めたそうです。

ここまでは階事としての祭りでしたが、浦賀の祭りの最大の特徴は付け祭の豪華さにあります。付け祭とは都市型の祭りの特徴的なもので、神事としての祭りではなく、神輿にのってくる神霊を祝はし、賑わいをつくるために各町内が独自につくりだす祝祭のことです。付け祭は見せること、見られることを意識した祭りですから、そこには様々な工夫や風潮がみられます。浦賀の各町の神輿が豆電球をつけていることなどはこの際たるものでしょう。ですから付け祭に臨む各町内は自分の町内の付け祭を如何に創造し、衆目をひきつけ、他を圧倒するかを競うようになり、ここに付け祭に対するエネルギーが生まれ、これが浦賀全体に伝わって伝統となっています。この付け祭の創造性がひいては町の文化を創る大きな役目となっています。

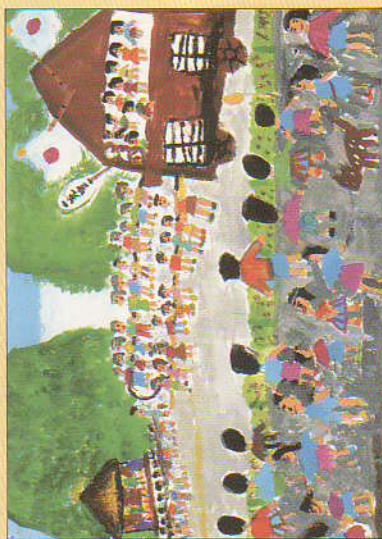
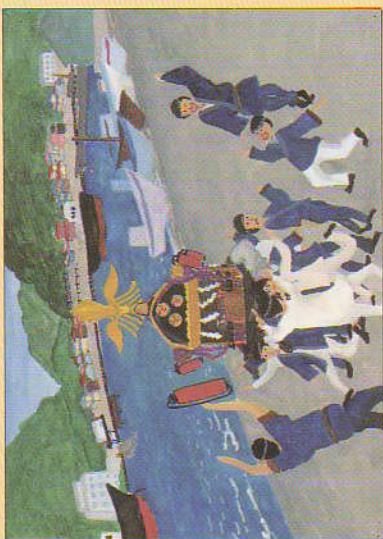


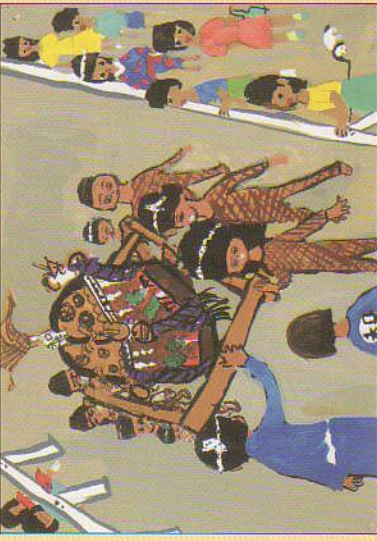
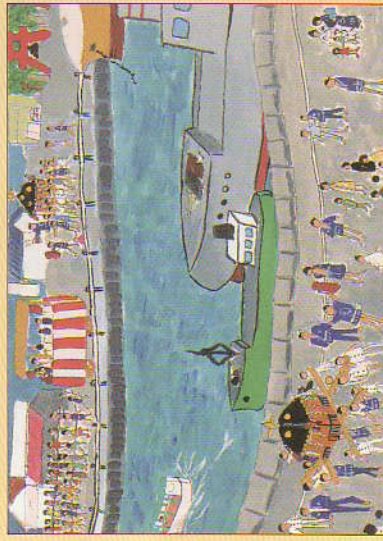


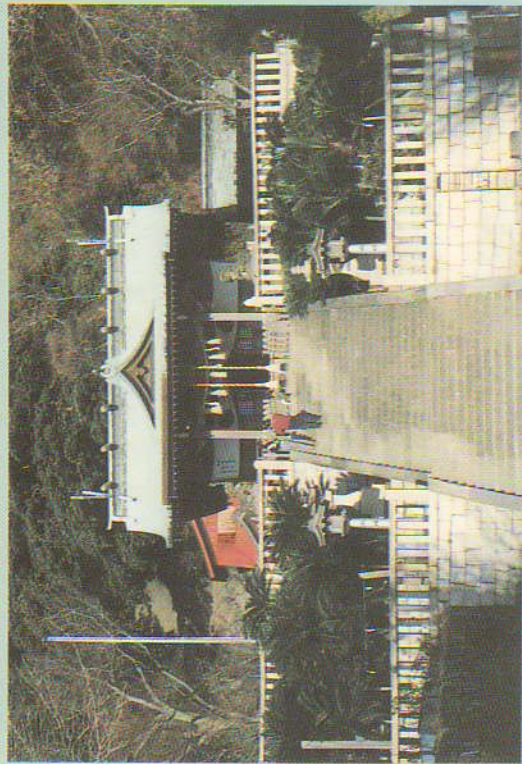










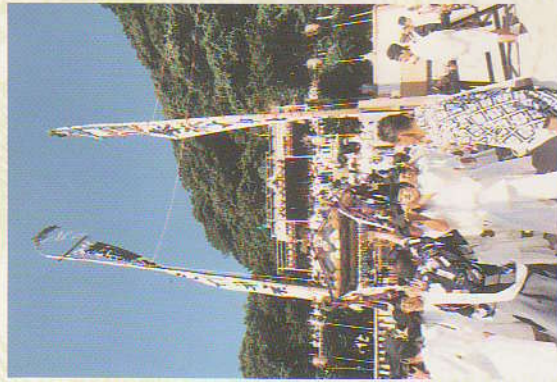


東岸・叶神社

東浦賀の総鎮守です。本来は応神天皇を祭神とする八幡さまなのですが、諸願が悉く叶えられたことから叶大明神と称し、明治時代になると叶神社となります。

叶神社の裏山、明神山には叶神社の奥宮が鎮座していますが、本当はここが叶神社の本殿になる建物です。江戸時代からあった建物は小さいながらも立派な彫刻が施されたものでしたが、昭和54年に焼失してしまい、現在の建物は創建八百年記念として再建されたものです。またこの場所には叶神社が永神寺といっていた江戸時代には修験者たちの火渡りの行が行なわれたところであり、戦国時代には浦賀城の本丸の跡でもあり、さらには、咸臨丸で太平洋横断を成功させた勝海舟が出発前に断食をした跡ともいわれる聖域です。現在はこの山全体が鎮守の森として県の文化財指定をうけています。

この祭礼は当初までは若宮丸(新井)・明神丸(洲崎)の二艘の船に特徴づけられ、勇壮のなかにも華麗さのある船祭りでした。現在の洲崎・新井の山車はこの船の飾りの一部が取り付けられています。





西岸・叶神社

西浦賀の総鎮守です。この裏山（通称嵐山）に文覚畑と呼ばれるところがあり、現在は碑が建っています、ここが文覚上人が源氏の再興を祈願して岩清水八幡を勧請したところで、この願いが叶ったことから叶の称号を与え、叶明神と称するようになりました。

現在の社は天保13年（1842）に再建されたもので、当時のお金で約3,000両を費やしたと云われています。なかでも拝殿の格天井や扉から棟持柱の上にまである彫りものは立派なものです。これは房州（千葉県）に住んでいた後藤利兵衛という人の作品で、後藤利兵衛はこれらの作品が認められて幕府の御抱の彫刻師となった人です。特に拝殿格天井の花鳥の彫りものは動植物学的にも大変に貴重なものです。

石段下の銅製の大燈籠は当時浦賀で洗濯屋と呼ばれていた遊廓の主人が寄進したものです。その脇にある水屋の漱器も江戸屋半五郎という遊廓を廃業して僧侶になった人が贈ったものです。

また、石段の上の狛犬は左右とも阿型をしており、子どもの獅子がすぐそばにいます。東叶神社の狛犬は左右とも吽型ですから当時の浦賀の人々が両社で一对という考えをもっていた事がわかります。

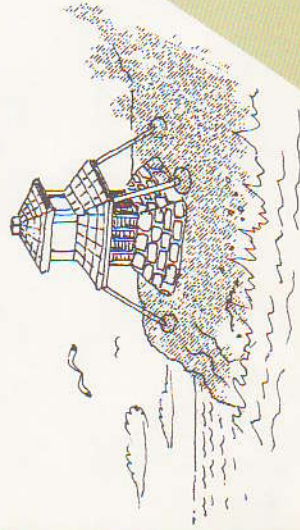


歴史と伝統の町・浦賀

浦賀の歴史と海は、いつも深い関係にあり、その歴史は縄文時代にまでさかのぼっていく。古代には古東海道の海の玄関・走水があり、三浦一族の活躍も吉井の怒田城を本拠にする三浦水軍の動きなしには語れないし、久比里坂下の陸上自衛隊の通信学校のある谷戸を「元浦賀」といって、鎌倉時代には有数の港であったことは文献によって確認できる。このように原始・古代・中世においても浦賀やこれを取りまく環境のすべてが海と深いつながりをもつものであった。

こうしたなかで、現在の浦賀の地に注目し、ここに城を築いたのは小田原に居を構える北条氏であった。東叶神社の裏山一帯に房総にいる里見氏を警戒するため砦、浦賀城がつくられ、水軍に關係する武士はもちろん、船大工や鍛冶屋まで遠く紀州や伊豆などから集められ、これらの人々が現在の東浦賀二丁目の洲崎町や新井町に住みはじめると東浦賀は現在のかたちの基礎ができてくる。そして、ここに千鰯問屋が建ち、諸国の廻船が立寄るようになり、さらに三浦安針（ウイリアム・アダムス）の進言によって徳川家康は浦賀を貿易港にしようと計画する。この時代の東浦賀には修道院が建ち、外国人と結婚する女性もあらわれ、東浦賀は東日本唯一の国際都市化していた。貿易港の計画は家康の死によって中止されるが、千鰯問屋は近畿地方を中心にした商売でその勢力を増し、これに伴って船の出入りは激しくなってきた。このため航海安全と航路標識の役割をもつ灯明堂が建設される。この千鰯問屋の力は伊豆下田にあった奉行所を東浦賀に移転する計画を変更させるほどであった。ところがこの奉行所が設置される頃を境にして千鰯問屋の勢いに勢いがみえはじめる。一方西浦賀の新興廻船問屋たちは徐々に大きくなってきて、浦賀の町の隆盛は東から西へと動きだしていた。

浦賀奉行所は軍事的な目的より経済的な目的で設置されたもので、特に船番所（現在の西浦賀一丁目、旧住重設計ビル敷地）では、従来の「入り鉄砲に出女」に加え、



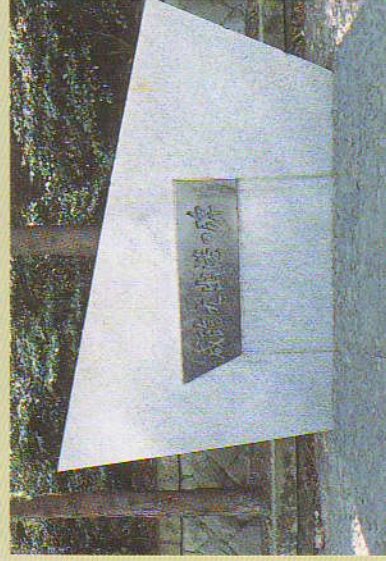
勝海舟 断食之跡



常福寺



浦賀奉行所跡



咸臨丸出航の碑



虎 踊 り



中島三郎助招魂碑(愛宕山公園)



浦 賀 港



燈 明 台 跡



中島三郎助の墓がある東林寺



渡 船 (愛宕丸)

米など生活必需品の検査を細かくやっていた。この仕事は奉行所の最も重要なものであった。この他の奉行所の仕事は行政・警察・裁判・海難救助、など多種多様に及んでいた。蒲賀奉行所の奉行の任にあった人々は約150年間で52人を数え、これら奉行の交代の職務引継は西浦賀の常福寺で行われ、このために作られた庭園は現在でも私達の目を楽しませてくれる。

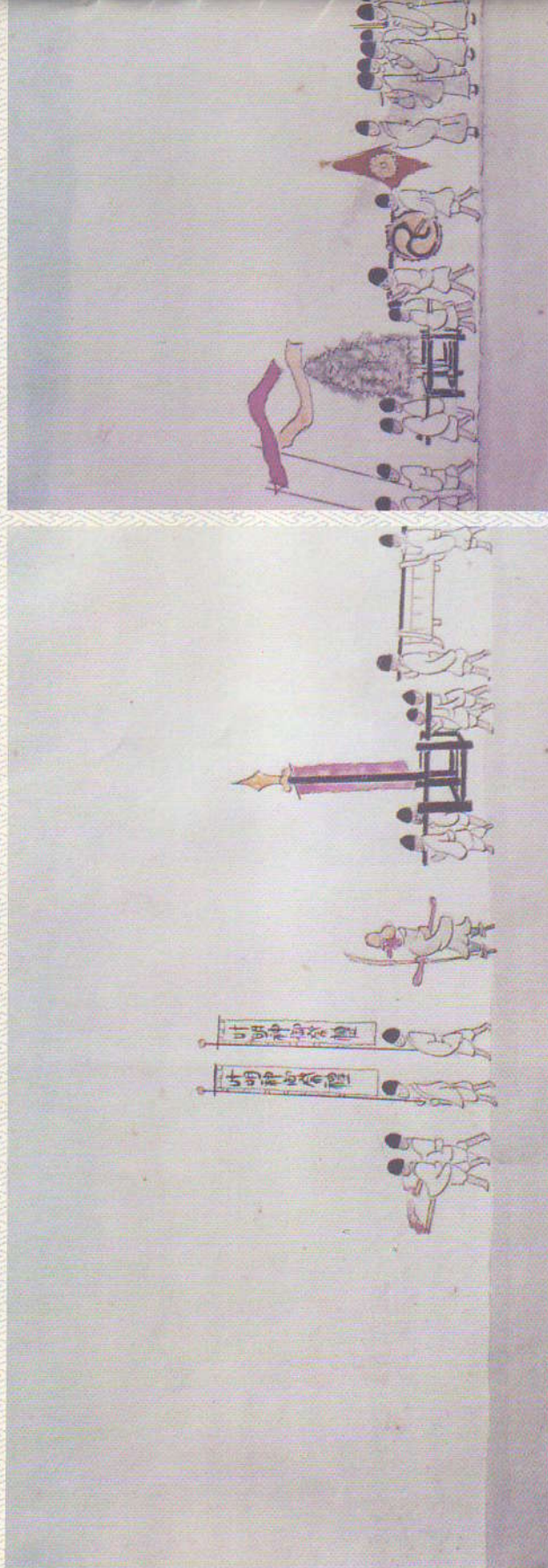
奉行所には奉行の下に実務担当者との与力とその実働担当の同心がいた。この与力職のなかで活躍した人物が中島三郎助である。三郎助の生涯は日本が近代国家建設に向って揺れ動いた激動の時代であり、彼の名を高く広めた事件がペリーの来航であった。この時、日本人として最初に黒船に乗り込み、艦内をつぶさに見て回り、その経験は翌年の日本で最初の洋式軍艦「鳳凰丸」を生む原動力となっている。しかし、最後まで幕臣であることを貫き通した三郎助は函館の戦争で二人の子とともに戦死した。東浦賀の東林寺には三郎助親子の墓所がある。

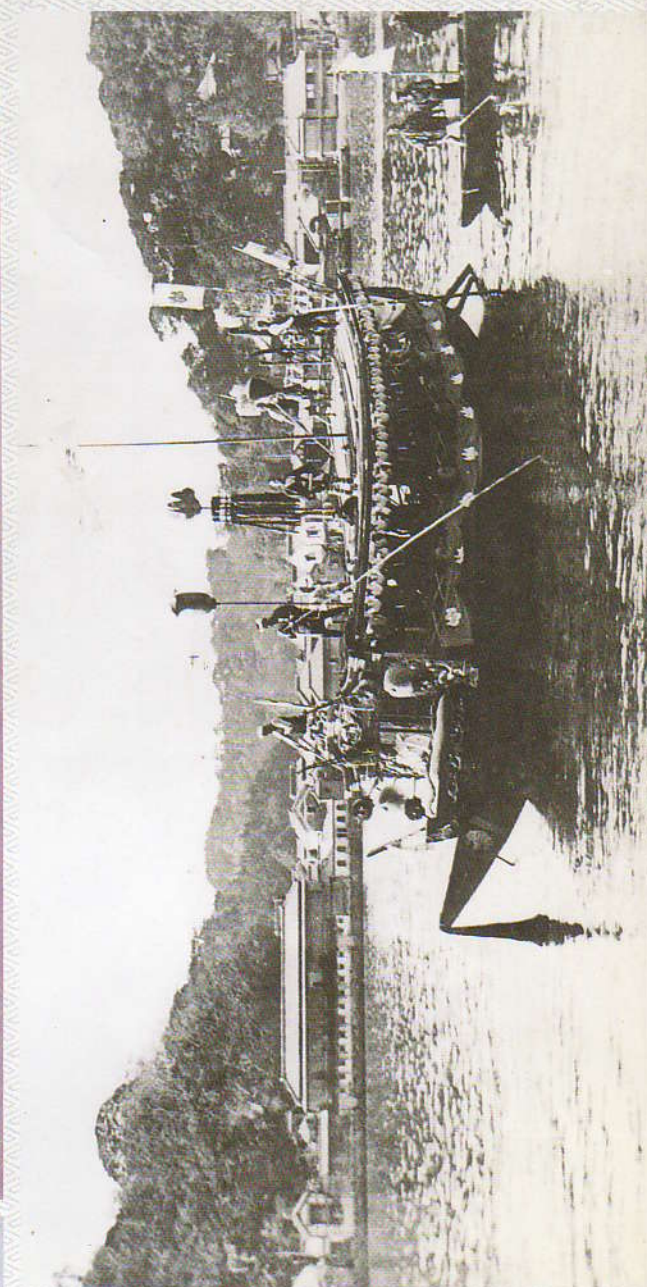
明治になって、蒲賀が生んだ幕末の偉人、中島三郎助を顕彰しようとする気運が生まれ愛宕山公園を開園し、ここに忠魂碑を建て、この開園の式典に出席した人々が中心となって、三郎助が興した事業、造船を継承しようとして「蒲賀ドック」が設立されることになる。

このように、原始時代からさまざまな形で海、さらに船と蒲賀の関わりは現代まで続いている。

一 祭 事

九月十五日ヲ其例祭日ト定ム古来ノ因襲ハ明治初年ノ頃迄祭事期間四日ニ亘ル十二日幟立十三日勢揃ヒトテ各町ノ警固行列ヲ整ヒ規律ヲ正シ順次当社ニ参拝スルヲ例トス警固ハ大人アリ小人アリ小人ニハ男女アリ別ニ適當セル揃ヒノ袴ヲ穿テ花笠ヲ戴キ手ニ杖ヲ携フ其風采優美ニシテ誠ニ愛スベシ十四日御浜降りトテ神輿ハ其儀杖ヲ出シ岸頭ナル大鳥居ノ前ニ渡御ス十五日氏子各町巡行警固全部ヲ二分シテ前衛後衛トス其中央ニ神輿及儀杖ノ一隊ヲ遺ギ其延長数丁ニ余ル而モ其規律井然トシテ進退動作統一セルヲ以テ古来世ニ称セラル所ナリ輿丁及祭器奉持者ハ何レモ白丁ニシテ数十人ヲ要ス伶人ハ絶エズ路樂ヲ奏シテ神意ヲ慰メ人心ヲ清快ナラシム十五日午前本社ヲ発シテ北部方面ヲ巡行シテ谷戸町ヨリ義装シタル船上ニ神輿ヲ奉シ徐ニ港内ヲ縦貫シテ南端ナラ浜町ニ上陸ス乗船ノ進行ヲ助ケルモノハ十数艘ノ伝馬船ニシテ舟子各十数人ヅツ乗組所謂船主ヨリ贈ラレタル揃ヒノ服装ヲナシ手ニ權ヲ取りテ船歌ヲ謡ヒ其調子ニ依リ転回ス其光景他ニ見ルコト能ハザルヲ以テ四方ヨリ来觀スルモノ甚タ多為ニ港内觀覽船ヲ以テ始ント覆ハレ岸頭立錐ノ地ヲ余サズ人ヲ以テ埋メラル又陸上ニ到ル処花車アリ手踊アリテ花下錦上ノ觀アラザルハナシ明治二十年以後此慣例ヲ廢シ祭事期間ヲ短縮シテ十四十五ノ兩日ト改ム爾後港内水上ノ盛況ハ見ルベカラザルモ是ニ代フルニ各町随意ノ意匠ヲ以テ余輿ニ供スルアレバ陸上ノ盛況ハ却テ前日ノ比ニアラザルヲ示ス





▲御座船



私たちの住む浦賀は“近代日本の夜明け”として日本史の上においても重要な役割を画した伝統文化と史跡の宝庫であります。

このたび「明日の浦賀をつくる会」100余名の会員が永い浦賀の歴史の中に残された尊い文化遺産をより多くの人たちに、関心や知識を持っていただきたいと結集し、その一環としてこの「浦賀のまつり」写真集を発刊いたしました。載っております写真や絵画は、地城写真マニアや小・中学生の応募によるコンクール等から選ばれた、手造りのものであります。

これを機会に、地域の子供たちからお年寄りまでが、残された数少ない自然を生かし、浦賀の町をいかに明るく、賑わいのある住み良い街づくりにへと夢(ロマン)を描き、祭ばやしを目にしながら、みなさんの語らいの源になれば幸と思います。

尚、未掲載の写真においては、紙面の都合上お許しを下さるよう、お願い申し上げます。